

抗リン脂質抗体陽性の不育症症例における

ヘパリン自己注射と妊婦の不安

06417550 難波沙由里

指導教員 中塚幹也教授

【緒言】

抗リン脂質抗体陽性の不育症症例に対し、ヘパリン注射は主要な治療法の1つである。従来の医療施設でのヘパリン注射は、長期間にわたる毎日の通院、注射の時刻を守るなどの制約により、身体的、精神的に不育症妊婦に種々の影響を及ぼしていると考えられる。

本研究では、最近導入されている、ヘパリンの自己注射による治療が不育症妊婦に与える身体的負担、経済的負担、精神的ストレスなどを、医療スタッフによる注射と比較検討したので報告する。

【方法】

岡山大学病院産婦人科不育症外来において、ヘパリン注射による治療を受けている妊婦、あるいは、受ける予定の女性136症例を対象とした。同意のもと、無記名の自己記入式質問紙に記入後、回収箱にて回収した。統計学的解析には、 χ^2 検定を用い、p値が0.05未満の場合を有意、0.1未満の場合は傾向とした。尚、本研究は、岡山大学医学部保健学科倫理委員会の承認のもと施行した。

【結果】

1. 症例背景

年齢 34.2 ± 4.3 (mean \pm S.D.) [24~44]歳。妊娠回数 3.6 ± 1.5 [0~8]回、流死産回数 2.4 ± 1.4 [0~7]回。

既往妊娠における治療について、治療の既往ありは52.9% (72例/136例)、また、治療により生児を得た率は50.0% (36例/72例)であった。

2. 注射方法と注射による不安

注射実施自体に対する不安について、「注射の恐怖感がある」は、自己注射を経験した女性の方が有意に高率であった(33.3%)。また、「薬や量を間違っていないか不安」は、医療スタッフによる注射を経験した女性の方が有意に高率であった。経済的負担に対しての感じ方について「治療費が高い」、「検査費が高い」は、ともに有意差は見られなかった。時間的制約による負担として「通院に伴う束縛感がある」は、医療スタッフによる注射を経験した女性の方が、有意に高率であった。「旅行や帰省ができない」は、医療スタッフによる注

射を経験した女性で、有意に高率であった。

3. 注射方法と注射によるストレス

注射中のストレス5段階の比較では、「注射に不安がある」、「緊張する」という項目において自己注射の方が有意に高かった。

【考察】

注射自体に対する「恐怖感」は、針や血を見ること自体の「恐怖感」に加えて、注射時に注射の準備を確認してもらったり、注射部位を確認してから注射したりということができないため、「恐怖感」が強まっている可能性がある。また、「薬や量を間違っていないかという不安」については、医療スタッフが目の前で用意して注射するなどの工夫により軽減できると考えられる。

経済的負担に対しては、自己注射では軽減されると考えられたが、今回の調査では、自己注射が治療費などの経済的な負担感の軽減にはつながらなかった。健康保険の適応が待たれる。

時間的制約による負担に関するストレスについては、自己注射によって毎日通院する必要がなくなり、時間的な束縛が軽減される。通院による束縛感の軽減により、不育症妊婦の自由な時間が増え、旅行や帰省も可能になり、妊娠期間のQuality of Lifeの向上につながると考えられる。

注射中のストレスについては、注射自体に対する恐怖感が自己注射の方が高いため、注射中も恐怖感が続き不安になったり、緊張したりする症例が多いと考えられる。指導法の改良や何かあったときに、いつでも相談できる体制も必要かもしれない。

【結論】

自己注射は、時間的な拘束や煩わしさを軽減させるのに有効な手段であった。しかし、経済的負担感の軽減にはつながらず、新たなストレスとして、注射への恐怖感、注射中の不安感や緊張感が強い傾向にある。経済的負担をさらに軽減できるような対策、自己注射中の不安や緊張感を軽減できるような自己注射の指導方法や自宅からの相談体制などの改善が必要である。